

『幸福の黄色いハンカチ』と夕張

山田洋次監督の作品は北海道を舞台にするものが多い。とくに印象に残る作品として、九州長崎から日本列島を縦断して、北海道の開拓地で新たな生活を始める夫婦を描いた『家族』、ラストシーンが忘れられない『遥かなる山の呼び声』、そして『幸福の黄色いハンカチ』である。

『幸福の黄色いハンカチ』は高倉健さん演じる勇作が北海道各地を車で転々として、最後は長年にわたり妻が待つ自宅に戻るという作品だ。自宅は最盛期には「炭都」と呼ばれた夕張である。1970年代半ばの夕張の風景が映し出される。炭住（炭鉱住宅）や商店街そして映画館、銭湯などを通して車が進む。銭湯に着くと、そこから坂の上の黄色いハンカチがなびく自宅が見える。足早に自宅に向かい、洗濯物を干している妻と再会する。やはり何回見ても感動的なラストシーンだ。

この6月20日、夕張市長は財政再建団体の申請を表明した。毎日新聞7月18日付（夕刊）の特集ワールド「破産した『炭鉱のマチ』夕張」は、山田監督のコメントを含めて興味深い。「タンコウからカンコウ。そんな標語を掲げた夕張市は映画祭や夕張メロンなど全国ブランドも育てた。だが結局は「ハコモノ行政」に陥り、それが破産の要因になったとされる。」2005年度決算ベースで標準財政規模44億円の市が負債632億円を抱え、「再建には半世紀は必要」といわれる。

この「夕張ショック」は、全国の自治体から注目を集めている。地方交付税の削減がつづき、自治体の破綻法制が検討されているからだ。第2、第3の夕張があらわれても不思議でない台所事情の自治体も多い。夕張市の「財政破綻」について検討すべき点は多いが、ここでは特集の山田監督のコメントを載せておきたい。「中央のキャリア官僚が地方のマチを知っているのか。黒字にすればいいのか。---」「炭住ではなく、六本木ヒルズに暮らすことは進歩なのでしょうか」「今の世の中から人情が消えてしまった。人間の暮らしがバラバラになってしまった。寅さんが訪ねることができるマチがあるのだろうか。もう、日本には故郷がないんじゃないかな。」

映画「幸福の黄色いハンカチ」と監督のコメントから、夕張を訪ねてみたくなった。

(2006年8月22日 記)